

とです。しかもこれは制度の問題です。文化やアイデンティティーだけではない、政治の制度・システムの問題です。沖縄が日本の「民主主義」の外に置かれたのはシステムの問題として置かれたので、沖縄の問題を解決される、または解決しようとすれば制度の問題まで話が及んでいくことになります。

もう少し細かい話をしようと思いましたが大雑把な話になってしまいました。参政権の話は年表をたどってみてください。そこから、日本の「民主主義」には内と外があり、しかもその内の範囲が狭まっているのが今の日本の状況だということを読み取っていただければいいと思います。沖縄の問題を考えると、それは日本の未解決の植民地の問題である、歴史問題であるということも思い起こしてほしいと思います。従軍慰安婦の問題と一緒です。さらにシステムの問題だという点もぜひ理解してほしいと思います。その意味では沖縄で現れている矛盾は日本の問題であり、しかも未解決の歴史問題だということです。

最後に一つ、日本の「民主主義」にある内と外の問題は、それはやがてあなたのエリア、立場や足元を揺さぶる問題でもあるということです。

第五報告

「中国の台頭」と台湾「天然独」パワー：香港「本土派」との比較を兼ねて

林泉忠（台湾・中央研究院近代史研究所副研究員）

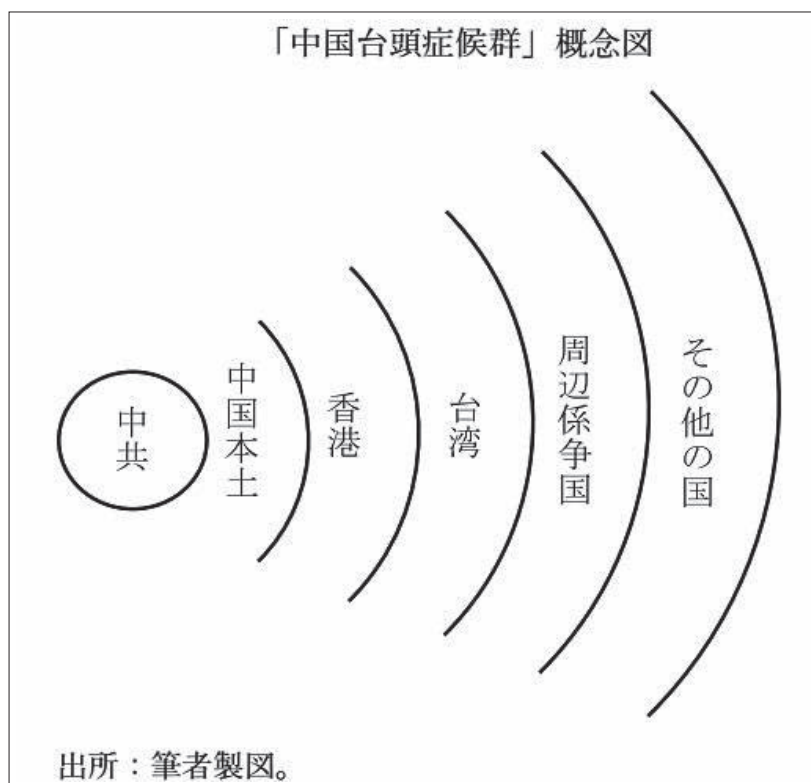
私は今日のシンポジウムのタイトルを見ますと、ちょっとうれしいといえますか、日本で開催される東アジアのいろんな国のシンポジウムの場合、大体中国、韓国、台湾が一番最後、香港はまず出てこないというのが一般的です。今日は逆転しましたね。台湾が最初に出てきて、ある意味では時代の変化を意識してそういうふうに準備されたのではないかと思います。今までの中国研究は台湾、香港を含めているという考えが一般的ですけれども、そうすると中国、括弧で台湾、香港が含まれているのが一般的です。最近になりますと中国、それから括弧なしで台湾、それから香港と並べるというケースが増えていると聞きますので、そういう意味では時代の変化も感じているのではないかと思います。今日のシンポジウムに非常に興味を持っています。本来私の研究は台湾だけではなくて香港、それから沖縄もやっていまして、また今日の場面で後田多さんは琉球大学時代のいい友人でもありますし、また香港からけさのご発表もありました方先生ともいい友達ということでこの再会の機会を作っていただいて大変うれしく思います。

さて、今日のテーマをいろいろ考えていたんですけれども、取りあえずこういうテーマにしようかと思います。20分しかないので早くで急いでいきたいと思っています。まず枠組みです。倉田先生のおかげで私が2年前にアジア政経学会で発表した「中国台頭症候群」というタイトルの論文が間もなく出版されるそうです²。今日の問題意識もそこにつながっているのではないかと思います。それから、私のちょっと古い本で申し訳ないですけれども2005年に出版した本で博士論文を書き直したものでございます。「辺境東アジア」という概念を提出しましていわゆる中心と辺境との関係と台湾、沖縄、香港を比較しています。『「辺境東アジア」のアイデンティティ・ポリティクス』（明石書店）という本ですが、もしかしたら神奈川大学の図書館にもあるかもしれませんのでよかったですら探して読んでください。

今日取り上げるこの「中国台頭症候群」という概念ですが私の「辺境東アジア」の概念とも少々つな



2 林泉忠「中国台頭症候群—香港・台湾から見た「チャイニーズ・システム」の課題」（『アジア研究』63-1、2017年）。



がっていると思います。まず、定義と特徴から説明したいと思います。取りあえず香港においては、この中国台頭症候群の原因を、経済力が台頭し世界のトップクラスの仲間入りを果たしても、民主化を拒否する姿勢を一貫して堅持するこの中国共産党の一方支配体制とその権力への執着に求めます。そしてその一方支配体制を懸命に維持するために内政および外交、あらゆる政策の最終目的をそれに合わせて設定するということです。

けれどもこのような統治方法と対外政策が、その国力の状況と相まってさまざまなひずみを生み出して、同心円の中心から周辺への異なった種類と威力の症候を発症し、各レベルで対立、摩擦、衝突といった事象を絶えず引き起こしています。同心円上の5つのレベルで私は今までまとめようとしているのですが、周知のように中国周辺で今も進行中の現象として、さまざまな摩擦が起きています。

時間の制約ということもございましてゆっくり説明できませんが、中共政権、中国共産党政権が一番中心にあるわけですが、直接支配する中国本土とももちろんその影響が一番大きいのですが、中国本土でもいわゆる「群体事件」、つまり民衆の一種の集団的抗議活動が年間何万件も起きています。またチベット、新疆といったような少数民族地域にもいろんな反発の行動が起きています。香港では、後ほど触れますけれども雨傘運動以降その中国との対立、摩擦は世界的にも注目されています。台湾のほうはずっと中国と緊張関係がありましたが、ひまわり学生運動をきっかけにその関係も一変するので、後ほどもう少し説明します。さらに外の周辺係争国と、島の領有権問題で日本と摩擦を起こしたり南シナ海を巡って東南アジア諸国との紛争も起きているわけです。さらに、いわゆるアメリカシステムに替わる中国システムの脅威ですね。今はどの国でも指摘されています。

こういうふうに「中国台頭症候群」を定義したわけですが、次に中国台頭と台湾との関係について見てみます。世界規模で中国台頭をどう捉えるのか、いろんなところでいろんな見解が述べられていますが、大きく言いますと、まず世界経済をリードするけん引車的な役割ですね。あと何年か経てばアメリカに替わる世界最大の経済パワーを担うのではないかという捉え方もございます。と同時に、いわゆる世界平和にプラスかマイナスか、場合によっては戦後今まで構築されてきた世界秩序、地域秩序にまで

脅威が及ぶと指摘されて議論されています。

しかし、台湾の場合、私が見るにちょっと違うのではないかと思います。もちろん脅威は存在しますが、その脅威は、日本とか韓国とは違って、台湾に対しては主権を要求するというのが一番大きな特徴です。そういう意味では台湾にとって脅威は常に存在するんです。もちろん内的脅威は中国が台頭する前からずっと存在したわけで、今も同じことですが、同時に中国台頭によってそのパワーが増したことから、人口も減っている台湾にとってはより心配が強まったのです。そのために中国台頭に対する対応も違います。日本もその一つかもしれませんが、経済的に中国との協力関係を求める国は多いですが、しかし台湾の場合、後ほど述べますけれども、ひまわり学生運動が起きてから中台経済一体化に対する見方はだいぶ変わってきました。中台一体化への警戒が高まっているのです。

さて、この中国台頭に対する対応でございますが、中国台頭の現象が顕著に表れたのは大体 21 世紀に入ってからのことだと思います。2008 年に台湾では国民党の馬英九政権が誕生しました。中国が台頭しつつある時期に馬英九政権が誕生したわけですが、彼が採った方策はこれまでとかなり違って、私はこれを中台蜜月期と呼んでいます。その構築の試みと挫折、崩壊、あるいは終焉というふうに、1 期目と 2 期目の違いを分析しています。1 期目のやり方は、まず中国経済のパワーで台湾経済を改善する。台湾経済がずっとうまくいかないという現状は続いていて、今も実は同じです。せっかく台頭している中国の経済パワーを利用して何とか台湾の経済を改善したいというのは、他の国の考え方と似ているわけです。それから 2 目ですが、馬英九政権が誕生する前の民主党的陳水扁政権のとき、中台関係は非常に悪かったんです。ですから台湾・台北の平和をどうやって維持するのか、どうやって改善するのか大きな課題でした。馬英九政権が考えたのは中台経済一体化によって台湾海峡の平和を維持する、強固にするというふうに考えていたんですね。

しかし、この考え方に対し、2 期目から台湾社会から反発が表れ始めました。なぜ反発に転じたかということですが、一つには中国による台湾への干渉が目立つようになってきたことがあります。例えば 2012 年に台湾の総統選が行われましたが、その直前、経済界の長老たちがそろって中国政府が求めるいわゆる 92 年コンセンサスの支持を表明し、その背後に中国の存在が指摘されました。また中国との経済関係の強い大手企業が台湾の有力紙の一つの『中国時報』を買収してその論調を中国寄りの論調に変えたことで、台湾の知識人と社会から反発が起こりました。他にもいろんな例がございすけれども時間の関係でこのぐらいにしましょう。

そしてついに、2014 年の 3 月 18 日から 24 日間かけていわゆるひまわり学生運動が発生して、この中国に対する不満が爆発したわけです。次にひまわり学生運動の周囲の状況について見ていきたいとします。ひまわり（学生）運動の特徴として、例えば学生主導の市民運動という性格が濃厚で、政府への不信、社会格差への不満、非暴力志向、民主主義の信念の強調、ネットによる動員などがございますが、中国の要因も大きいです。私は中国要因として、中台サービス貿易協定の立法院における乱暴な可決を契機として、その背後にある中台経済一体化による台湾政治に対する中国からの干渉の増大や、台湾の主権、主体性への侵害の危惧が表面化した、と考えています。

「天然独」パワーの特徴についてごく簡単に説明させていただきます。「天然独」という表現はひまわり運動が終わってから現れた新しい言葉です。その命名については現在の総統・蔡英文氏と関係があります。民進党党大会を控えた時点で、党の綱領の中の独立志向の内容を削除するかしないかという議論に対し、蔡英文主席は台湾独立、台湾主権を堅持する考えから、独立が若者の中で既に一種の「天然成分」、自然に存在する生まれつきのような存在となっていると表現しました。これがやがて「天然独」という言葉になって流行したわけです。「天然独」と伝統的台独派との違いについて、私はこういうふうに説明しています。主に 2 つありますが、まず第 1 です。伝統的台湾独立のイデオロギーのイメージは、長い間タブー視されて戦ってきたという歴史的悲壮感を有し、かつ後天的性格を帯びているのに対して、「天然独」の方は生まれつき、先天的という性格を濃厚に持つと同時に、歴史的悲しみを背負うことなく、台湾は既に独立国家であると当然のことと持っているという特徴を有しているということです。こうした性格から「天然独」世代は、台湾独立に関する言動への批判に拒否反応を起こしやすいと

いう特徴があります。

もう一つ、この「天然独」の仮想敵は、もはや過去の権威主義体制時代の国民党でも、台湾民主化初期の時代の中国でもなく、むしろ台頭している中国、及び中国に傾斜している国民党です。台湾独立運動が盛んだった権威主義時代および民主化初期の90年代において、台湾独立の戦う対象は言うまでもなく国民党でしたが、この時期の台湾独立の性格は抑圧される側の本省人による抑圧する側の外省人への反発という、エスニックな省籍問題の様相を濃厚に帯びていました。これに対し、2000年、民進党政権が誕生しますと、台湾独立の戦う対象は武力行使を持さない中国へと移り、それはひまわり運動の時代に入りますと「天然独」が反発している対象に変わりました。中国に加え、馬英九時代においてますます中国に傾斜するようになった国民党政権も反発の対象になりました。

さて、天然毒パワーの台湾内部での影響、中台関係への影響を見ていきたいと思います。まず台湾内部の影響ですが、1つ目として、馬英九政権の中台経済一体化路線の継続を中止させ、蔡英文政権の誕生の機運を作ったことがあります。2つ目は、テーマにもよりますが市民運動、社会運動をリードしていく存在として、政府の政策にも影響を与えています。今も台湾社会でさまざまな市民運動が起きていますが、そこには常に「天然独」世代の姿が見られます。例えば最近のいわゆる同性婚立法の運動などです。3つ目として、依然として今後の台湾政治を展望するには見逃せないキーワードになっています。

中台関係への影響については、まず第1に、中国の台湾政策の見直しにつながっており、同時にそれを非常に困難にさせています。2つ目ですが、中台統一の可能性を消滅させるかもしれません。まだ予断は許さない状態で、もう少しゆっくり見る必要はあるかもしれませんが、現在としては可能性がだいぶ低くなっているということは言えます。と同時に中国社会、大陸の方との健全な関係をどうやって再構築するのかが、台湾社会にとって一つの課題だと思います。

最後に、台湾「天然独」と香港「本土派」の比較について、時間がないので簡単に述べます。香港の「本土派」について、今朝の方先生のご説明もあったかもしれませんが、日本語としては「本土派」という言葉は分かりにくいですね。この3文字は台湾や香港では地元派、地元志向という意味です。これについて香港と台湾では3つの類似性があります。まず第1に、若者中心、それから街頭行動も含んだ社会運動への積極的参加があります。2つ目は、当然ながら地元優先志向、3番目に、中国とは別の国、または中国との政治的関係を希薄にしようとする傾向がございます。ただし両者には相違性もございます。まず香港の場合、急進派とか非主流派というイメージがあります。また香港独立という主張に対して躊躇する部分もかなりございます。台湾は違います。台湾の場合「天然独」世代はむしろ社会をリードしていく主流派で、またそのような自信を持っています。

最後に、21世紀の台湾史におけるひまわりと「天然独」の位置付けを2点だけ簡単に述べます。まず第1です。21世紀の台湾史、中台関係史から見て、「天然独」、あるいはひまわり学生運動の存在は歴史的に非常に意味が大きいです。台湾の民主主義とアイデンティティーの発展、中台関係の見直しに歴史的役割を果たしていると思います。

2点目ですけれども、中国台頭への警鐘を鳴らし、台湾・香港の関係の新しい考えに刺激を与え、また将来の日台中関係の行方にも大きな影響を与えたいと思います。一方中国の台頭にとっては香港・台湾からの反発は大きな課題ですね。私は常に中国に対して以下のことを強調しています。それは孔子がおっしゃった言葉で、「遠人服さざれば、則ち文徳を脩めて、以て之を來たす」ということです。ちょっと長くなったんですけど私の発表を終わりにさせていただきます。

総合討論

これから総合討論に入っていきたいと思います。まずは各報告者から他の報告者に対して、相互の報告について自分の挙げた事例と比較した上で、ご質問なりご意見なりしていただくという形にしたいと思います。では、第1報告の方志恒先生。